

s 4. 20 代以上の一人当たり死傷損失の算定

s 4.1 過年度調査結果の概要と課題の整理

s 4.1.2 平成 28 年度調査の残された課題

交通事故による非金銭的損失の算定方法に関して、平成 27 年度調査より得られた課題と平成 28 年度調査における対応、平成 28 年度調査から得られた成果と課題を整理した。

表 s 4-1 平成 27 年度調査より得られた課題及び平成 28 年度調査における対応と得られた示唆

種類	検討項目	平成 27 年度調査より得られた課題	平成 28 年度調査における対応と得られた成果と課題
共通事項	「特別な治療」に関する理解度	「特別な治療」は現実的には存在しない治療であることから、「特別な治療」という曖昧な表現だけでは仮想の手段と割り切ることができないという意見があった。	「特別な治療」について、仮想的な手段であることの表現を追加し、仮想であることに対する理解度の質問をした結果、多くの回答者が仮想的な手段として認識していたことが確認できた。
死亡損失の評価	順序バイアスの回避	死亡リスク削減率 25%と 50%の回答者を分けて支払意思額を聞き、順序バイアスの除去を試みた。その結果、50%削減率の方が 25%削減率より支払意思額が高くなり、整合的な結果が得られた。	<ul style="list-style-type: none"> 平成 28 年度のプレ調査においても改めて死亡リスク削減率 25%と 50%の回答者を分けて調査を実施した結果、平成 27 年度調査と同様に、整合的な結果が得られた。 平成 28 年度の本調査では、過年度の調査との継続性や他事例での削減率の設定の状況を踏まえ、50%削減率で調査を実施した。
	非理解回答の要因把握	設問内容の理解度を確認する設問について、平成 27 年度調査ではマルチアンサー形式(平成 23 年度はシングルアンサー形式)としたことにより、設問の内容は理解をしつつも、誤って非理解に相当する選択肢を選んでしまった回答者が多くなったと考えられ、非理解回答の割合が平成 23 年度調査よりも多くなった。	平成 28 年度のプレ調査・本調査で、マルチアンサーからシングルアンサーに変更したことで、有効回答のサンプルが平成 27 年度調査より増加した。

種類	検討項目	平成 27 年度調査より得られた課題	平成 28 年度調査における対応と得られた成果と課題
負傷損失の評価	負傷区分の数	平成 27 年度の調査では、アンケートの質問の分量に関する質問で「多い」とする意見が半数を超えており、また、負傷区分や負傷損失の原単位の多少の変動は死傷損失総額に大きな影響を与えない一方で作業者の負担を考慮すると、負傷区分は現行の 8 区分をより少ない区分にまとめる措置が必要である。	平成 28 年度のプレ調査では、平成 27 年度調査の負傷区分 8 区分のうち負傷 Q と W を負傷 Q に統合、I,Y,R を負傷 Y に統合し、後遺症が同一で入院中の身体レベルが異なる N を新しく設定して、負傷区分を 6 区分として調査を実施した。調査結果を分析すると、負傷 N と O では、RS 法、SG 法との評価が逆転し、また負傷 Y,O,N の評価の差が大きくなかったことから、平成 28 年の本調査では負傷 N については調査をしないこととした。
	死亡対負傷の望ましき選択	平成 27 年度調査の SG 法では、「死んだ方がマシ(WTD)」または「死ぬよりマシ(BTD)」の死亡対負傷の望ましき選択において「死んだ方がマシ(WTD)」の回答が軽傷でも見られ、負傷間の差を把握できていない可能性があった(平成 23 年度調査では死亡対負傷の望ましきの判別に RS 法を採用したが、平成 27 年度では RS 法を採用しなかった)。RS 法を採用し、すべての負傷区分を提示し、被験者に比較させる手順が必要である。	平成 28 年度のプレ調査・本調査の SG 法では、RS 法のようにすべての負傷カードをみせ、負傷間の差を把握し、カードを望ましい方から順番に選択したことで、「死んだ方がマシ(WTD)」の回答者の比率が平成 27 年度調査より激減した。
	設問内容の理解度	死亡と負傷のどちらがマシか(WTD か BTD か)という死亡対負傷の望ましきの判断には、家族などへの経済負担を忌避したいという回答者の思考が影響する可能性があるため、平成 27 年度調査においても、平成 23 年度調査と同様に、金銭的負担がない前提を記載している。しかし、その前提を回答者が十分に読んで認識していない可能性がある。	平成 28 年度のプレ調査では、金銭的負担がない前提について、回答者が十分に認識できているか確認するため、死亡対負傷の望ましきの設問の後に、「死亡したほうがマシ」を選択した理由を回答させる設問を追加したことで、「死亡したほうがマシ」の回答者の比率が平成 27 年度調査より激減し、回答者自身の回答を見直す機会となったと考えられる。本調査でも理由を回答する設問を引き続き設定した。
	負傷程度が低い区分における計測方法の選択	・確定 CV 法は、所得の影響を受けるため、一定金額以上の支払意思額の推計は困難であり、また WTP ではなく ATP となる可能性が高いことから、引き続き軽い負傷区分のみへの適用が望ましい。 ・SG 法で評価可能すべき負傷区分と確定 CV 法で評価すべき負傷区分について、明確な結論が必要。	・負傷程度が低い区分について、確定 CV 法・SG 法・RS 法のどの方法の結果の値を選択するかは、専門家による判断(エキスパートジャッジ)する方法や、QOL の効用値等を活用することが必要。平成 28 年度の本調査では、参考値として QALY で試算した。 ・平成 28 年度調査では、本調査の算出結果として後遺障害のない区分である負傷 A のみ確定 CV 法の結果を使用し、その他の負傷区分では SG 法の結果を使用した。負傷 O は SG 法から算定した結果を用いて、後遺障害等級ごとに算出した。

(1) 共通事項

1) 「特別な治療」に関する理解度

平成 27 年度調査の課題

「特別な治療」は、現実的には存在しない治療であることから、「特別な治療」という曖昧な表現だけでは仮想の手段と割り切ることができないという意見があった。

平成 28 年度調査の対応と得られた成果と課題

「特別な治療」について、平成 28 年度調査のプレ調査では、設問に仮想的な手段であることの表現を追加した。その上で、「特別な治療」が仮想であることに対する理解の質問をした結果、「十分に理解して回答」及び「ある程度理解して回答」した回答者が 8 割以上となり、多くの回答者が仮想的な手段であることを認識していたことがわかった。

平成 28 年度調査の本調査でも同様に、「十分に理解して回答」及び「ある程度理解して回答」した回答者が 9 割以上となり、仮想的な手段であることが認識されていたことがわかった。

表 s 4-2 「特別な治療」が仮想的な手段であることの認識(平成 28 年度プレ調査結果)

選 択 肢		回答数	比率(%)
1	仮定であることは十分に理解して回答していると思う	2,844	55.5
2	一部納得はしていないが、ある程度理解して回答していると思う	1,435	28.0
3	よく理解していないが、なんとなく回答した	566	11.1
4	そのような仮定は納得できない	275	5.4
全 体		5,120	100.0

(2) 死亡損失の評価

1) 順序バイアスの回避

平成 27 年度調査の課題

平成 23 年度調査では、同一回答者に対して、死亡リスク削減率 20%と 50%に対する支払意思額を両方聞いた。平成 27 年度調査では、死亡リスク削減率 25%と 50%の回答者を分けて支払意思額を聞き、順序バイアスの除去を試みた。その結果、50%削減率の方が 25%削減率より支払意思額が高くなり、整合的な結果が得られた。

平成 28 年度調査の対応と得られた成果と課題

平成 28 年度調査のプレ調査においても、順序バイアスの除去のため改めて 25%削減率の調査と 50%削減率の調査とで回答者を分けて調査を実施した。支払意思額について抵抗回答・非理解回答を除去した場合で試算を行った結果、25%削減率の中央値は 6,800 円、50%削減率の中央値は 8,571 円となり、50%削減率の支払意思額の方が高くなるという整合的な結果が得られた。

平成 28 年度の本調査においては、過年度の調査との継続性や他事例での削減率の設定の状況を踏まえ、50%削減率で調査を実施した。

表 4-3 ロジットモデルのパラメータ推定結果 <『安全グッズ』(死亡リスク削減率 25%) >

	全サンプル			有効回答サンプル		
	係数	t 値	p 値 ¹	係数	t 値	p 値 ¹
定数項	5.4286	36.064	0.000***	7.4263	33.108	0.000***
$\ln(Bid)$	-0.6801	-38.154	0.000***	-0.8415	-33.289	0.000***
対数尤度	-3140.321			-2100.933		
サンプル数	2,560			1,520		
中央値(円)	2,930			6,800		
平均値(円) ²	17,018			21,722		

1: *** 1%有意、** 5%有意、* 10%有意

2: 平均値は最大提示額(10万円)で裾きり

表 4-4 ロジットモデルのパラメータ推定結果 <『安全グッズ』(死亡リスク削減率 50%) >

	全サンプル			有効回答サンプル		
	係数	t 値	p 値 ¹	係数	t 値	p 値 ¹
定数項	5.8819	37.646	0.000***	7.7682	34.160	0.000***
$\ln(Bid)$	-0.7061	-39.356	0.000***	-0.8578	-34.433	0.000***
対数尤度	-3269.332			-2261.712		
サンプル数	2,560			1,618		
中央値(円)	4,149			8,571		
平均値(円) ²	19,513			24,366		

1: *** 1%有意、** 5%有意、* 10%有意

2: 平均値は最大提示額(10万円)で裾きり

2) 非理解回答の要因把握

平成 27 年度調査の課題

設問内容の理解度を確認する設問について、平成 27 年度調査ではマルチアンサー形式(平成 23 年度はシングルアンサー形式)としたことにより、設問の内容は理解しつつも、誤って非理解に相当する選択肢を選んでしまった回答者が多くなったと考えられ、非理解回答の割合が平成 23 年度調査よりも多くなった。

平成 28 年度調査の対応と得られた成果と課題

非理解回答を選別する設問について、マルチアンサーの選択肢であると、設問の設定を理解しつつも誤って非理解に相当する選択肢を選んだ場合、「非理解回答」として処理される。そこで平成 28 年度のプレ調査では、マルチアンサーからシングルアンサーによる選択肢に変更した。

対象財が「安全グッズ」で死亡リスク削減率が 50%のとき、平成 27 年度調査(マルチアンサー)では有効回答が 43.9%だったところ、平成 28 年度調査(シングルアンサー)では有効回答がプレ調査で 63.2%、本調査で 66.5%となり、有効回答のサンプルが平成 27 年度調査より増加した。

表s 4-5 平成 27 年度調査の有効回答と抵抗・非理解回答の比率

	サンプル数(人)[マルチアンサー]			比率(%)	
	有効回答	抵抗・非理解回答	計	有効回答	抵抗・非理解回答
安全グッズ:50%	843	1,077	1,920	43.9	56.1
全設問	3,892	3,788	7,680	50.7	49.3

表s 4-6 平成 28 年度プレ調査の有効回答と抵抗・非理解回答の比率

	サンプル数(人)[シングルアンサー]			比率(%)	
	有効回答	抵抗・非理解回答	計	有効回答	抵抗・非理解回答
パターン 1(安全グッズ:25%)	1,520	1,040	2,560	59.4	40.6
パターン 2(安全グッズ:50%)	1,618	942	2,560	63.2	36.8
計	3,138	1,982	5,120	61.3	38.7

表s 4-7 過年度調査における有効回答と抵抗・非理解回答の比率(安全グッズ:50%)

	サンプル数(人)			比率(%)	
	有効回答	抵抗・非理解回答	計	有効回答	抵抗・非理解回答
平成 28 年度本調査	1,489	751	2,240	66.5	33.5
平成 28 年度プレ調査	1,618	942	2,560	63.2	36.8
平成 27 年度調査	843	1,077	1,920	43.9	56.1
平成 23 年度調査	625	375	1,000	62.5	37.5

(3) 負傷損失の評価

1) 負傷区分の数

平成 27 年度調査の課題

平成 27 年度の調査では、アンケートの質問の分量に関する質問で「多い」とする意見が半数を超えており、また、負傷区分や負傷損失の原単位の多少の変動は死傷損失総額に大きな影響を与えない一方で作業者の負担を考慮すると、負傷区分は現行の 8 区分をより少ない区分にまとめる措置が必要である。

平成 28 年度調査の対応と得られた成果と課題

負傷区分について、平成 28 年度のプレ調査では、平成 27 年度調査の負傷 Q と W を負傷 Q に統合し、負傷 I、Y、R を負傷 Y に統合した。また、負傷 O と後遺症が同一で、入院中の身体レベルは負傷 O より重い負傷 N を新しく設定した。それにより、平成 27 年度調査の負傷 8 区分から平成 28 年度調査のプレ調査では 6 区分とした。

		障害度					死亡K
		1	2	3	4	5	
後遺症	1				負傷Q		死亡K と同等
	2				負傷W		
	3						
	4				負傷E		
	5						
	6						
	7	負傷I		負傷Y	負傷R		
	8	負傷O					
	9						
	10						
	11	負傷A					
	12						
	13						
	14	健康J					
後遺症なし							
健康J							

図s 4-1 平成 27 年度調査における負傷区分の設定

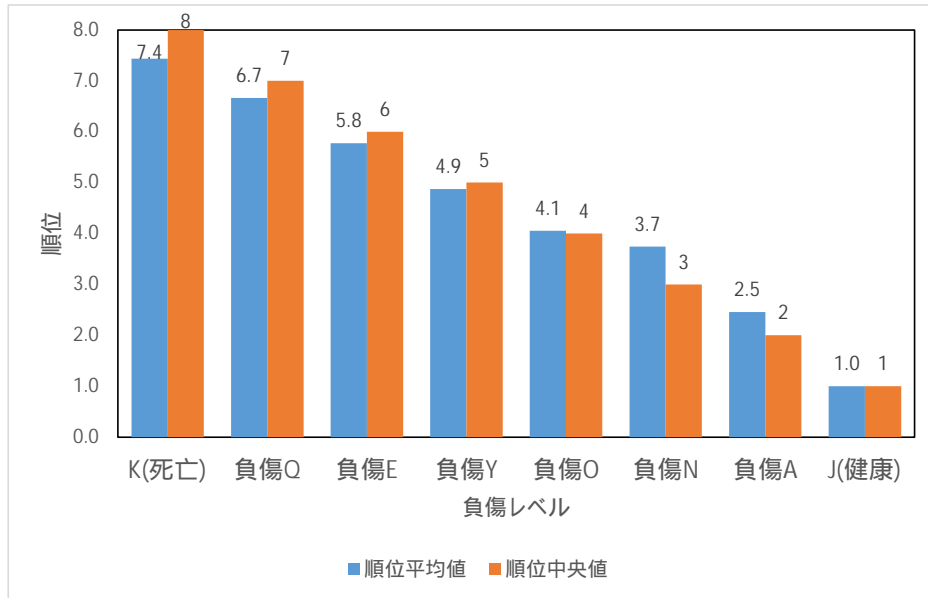
			障害度						死亡K						
			1		2		3			4		5		6	
後遺症		1													
		2													
		3													
		4													
		5													
		6													
		7	負傷Y												
		8	負傷Y												
		9	負傷Y												
		10	負傷O												
		11													
		12													
		13													
		14													
後遺症なし			負傷A												
健康J															

図s 4-2 平成 28 年度プレ調査における負傷区分の設定

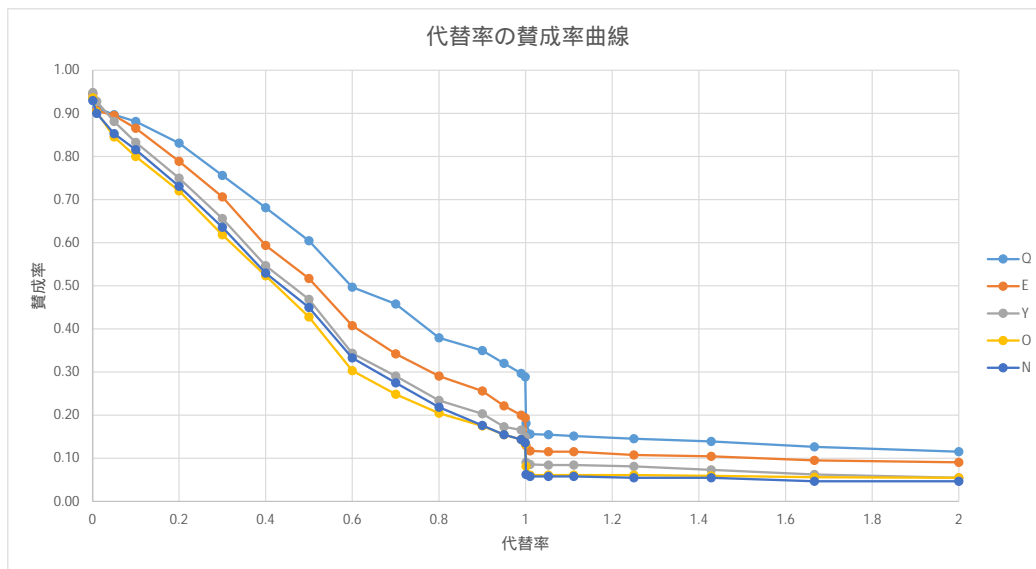
ランキング法では、平成 28 年度のプレ調査で、回答者に健康 J を 1 位として望ましいものから順に負傷カードを選択してもらった結果、新たに追加した負傷 N は、設定としては後遺症が負傷 O と同じレベルで、障害度が負傷 O より重いレベルであるが、回答結果の順位は負傷 O より上となった。

SG 法では、死亡と提示した負傷状態との比較を踏まえた代替率の賛成率曲線を回答結果から作成してみると、負傷 Q から O まで負傷区分が軽傷になるに従い、代替率が低くなる傾向があった。しかし、負傷 Y、O、N では差が見られなかった。

以上より、負傷 N と O では、ランキング法、SG 法との評価が逆転し、負傷 Y、O、N の評価の差が大きくなかったことから、平成 28 年度の本調査においては負傷 N については調査をしないこととした。



図s 4-3 平成 28 年度プレ調査における死傷区分別順位の結果(ランキング法)



図s 4-4 平成 28 年度プレ調査における代替率の賛成率曲線(SG 法)

			障害度						死亡K
			1	2	3	4	5	- 6	
後遺症	1	1				負傷Q		死亡K と同等	
		2							
		3							
	4	4				負傷E			
		5							
		6							
	7	7	負傷Y						
		8							
		9							
	10	10	負傷O						
		11							
		12							
		13							
		14							
後遺症なし		負傷A							
健康J									

図s 4-5 平成 28 年度本調査における負傷区分の設定

2) 死亡対負傷の望ましさ選択

平成 27 年度調査の課題

平成 27 年度調査の SG 法では、「死んだ方がまし (WTD)」または「死ぬよりまし (BTD)」の死亡対負傷の望ましさ選択において「死んだ方がまし (WTD)」の回答が軽傷でも見られ、負傷間の差を把握できていない可能性があった (平成 23 年度調査では死亡対負傷の望ましさの判別に RS 法を採用したが、平成 27 年度では RS 法を採用しなかった)。RS 法を採用し、すべての負傷区分を提示し、被験者に比較させる手順が必要である。

平成 28 年度調査の対応と得られた成果と課題

SG 法では、死亡と提示した負傷区分とを比較し、どちらがよりマシな (望ましい) 状態であるかによって、ギャンプルの対象とする設問構造が異なる。死亡するよりは提示した負傷区分の方がマシな (望ましい) 状態と判断した回答者は、全快対死亡で成功確率を回答し (失敗すると死亡)、逆に提示した負傷区分より死亡する方がマシな (望ましい) 状態と判断した回答者は、全快対提示した負傷区分で成功確率を回答する (失敗すると望ましくない負傷区分)。

死亡対負傷の望ましさについて、平成 27 年度調査では、「死んだ方がまし (WTD)」との回答が負傷 Y、I、O のような軽傷でも見られ、負傷間の差を把握できていない可能性があった。そのため平成 28 年度のプレ調査・本調査では、ランキング法のようにすべての負傷カードをみせ、負傷間の差を把握し、カードを望ましい方から順番に選択する設計とした。その結果、平成 27 年度調査では負傷 Y、I、O で「死んだ方がまし (WTD)」の回答者の割合が 3 割 ~ 4 割であったところ、平成 28 年度のプレ調査では負傷 Y、I、N で 1 割未満に抑えられ、「死んだ方がまし (WTD)」の回答者が激減した。

表s 4-8 平成 27 年度調査の死亡対負傷の望ましき選択比

負傷区分	回答者数(人)			比率(%)	
	負傷の方がマシ	死亡した方がマシ	総計	負傷の方がマシ	死亡した方がマシ
負傷 Q	111	529	640	17.3	82.7
負傷 W	166	474	640	25.9	74.1
負傷 E	219	421	640	34.2	65.8
負傷 R	290	350	640	45.3	54.7
負傷 Y	334	306	640	52.2	47.8
負傷 I	385	255	640	60.2	39.8
負傷 O	419	221	640	65.5	34.5
計	1,924	2,556	4,480	42.9	57.1

表s 4-9 平成 28 年度プレ調査の死亡対負傷の望ましき選択比

負傷区分	回答者数(人)			比率(%)	
	負傷の方がマシ	死亡した方がマシ	総計	負傷の方がマシ	死亡した方がマシ
負傷 Q	524	116	640	81.9	18.1
負傷 E	557	83	640	87.0	13.0
負傷 Y	582	58	640	90.9	9.1
負傷 O	588	52	640	91.9	8.1
負傷 N	600	40	640	93.8	6.3
計	2,851	349	3,200	89.1	10.9

3) 設問内容の理解度

平成 27 年度調査の課題

死亡と負傷のどちらがマシか(WTD か BTD か)という死亡対負傷の望ましきの判断には、家族などへの経済負担を忌避したいという回答者の思考が影響する可能性があるため、平成 27 年度調査においても、平成 23 年度調査と同様に、金銭的負担がない前提を記載している。しかし、その前提を回答者が十分に読んで認識していない可能性がある。

平成 28 年度調査の対応と得られた成果と課題

平成 28 年度のプレ調査では、金銭的負担がない前提について、回答者が十分に認識できているか確認するため、死亡対負傷の望ましきの設問の後に、「死亡したほうがマシ」を選択した理由を回答させる設問を追加した。それにより「死亡したほうがマシ」の回答者の比率が平成 27 年度調査より激減し、回答者自身の回答を見直す機会となったと考えられる。本調査でも理由を回答する設問を引き続き設定した。

表s 4-10 平成 27 年度調査の死亡対負傷の望ましさを選択比(再掲)

負傷区分	回答者数(人)			比率(%)	
	負傷の方がマシ	死亡した方がマシ	総計	負傷の方がマシ	死亡した方がマシ
負傷 Q	111	529	640	17.3	82.7
負傷 W	166	474	640	25.9	74.1
負傷 E	219	421	640	34.2	65.8
負傷 R	290	350	640	45.3	54.7
負傷 Y	334	306	640	52.2	47.8
負傷 I	385	255	640	60.2	39.8
負傷 O	419	221	640	65.5	34.5
計	1,924	2,556	4,480	42.9	57.1

表s 4-11 平成 28 年度プレ調査の死亡対負傷の望ましさを選択比(再掲)

負傷区分	回答者数(人)			比率(%)	
	負傷の方がマシ	死亡した方がマシ	総計	負傷の方がマシ	死亡した方がマシ
負傷 Q	524	116	640	81.9	18.1
負傷 E	557	83	640	87.0	13.0
負傷 Y	582	58	640	90.9	9.1
負傷 O	588	52	640	91.9	8.1
負傷 N	600	40	640	93.8	6.3
計	2,851	349	3,200	89.1	10.9

4) 負傷程度が低い区分における計測方法の選択

平成 27 年度調査の課題

確定 CV 法は、所得の影響を受けるため、一定金額以上の支払意思額の推計は困難であり、また WTP ではなく ATP となる可能性が高いことから、引き続き軽い負傷区分のみへの適用が望ましい。また、SG 法で評価可能なべき負傷区分と確定 CV 法で評価すべき負傷区分についての線引きが必要である。

平成 28 年度調査の対応と得られた成果と課題

負傷程度が低い区分について、負傷区分間の一人当たりの損失額に差がなくなった場合については、確定 CV 法・SG 法・ランキング法のどの方法の結果の値を選択するか、専門家による判断(エキスパートジャッジ)や QALY の活用や専門家の判断による負傷間の価値の重み付けの検討を行うことが考えられる。

平成 28 年度の本調査では、参考値として、SG 法や確定 CV 法の他に、QALY(Quality Adjusted Life Years) を算出した。

QALY (Quality Adjusted Life Years) は、生存年数と生活の質 QOL (quality of life) の双方を考慮した指標である。QALY 指標は、日本語版 EuroQol (EQ-5D) によって各負傷区分の健康状態を QOL による効用値に換算し、健康を 1 とした時の効用値と

の差分に期間を乗じて負傷区分ごとに算出する。QALY 指標における死傷損失を算出し、SG 法、確定 CV 法の結果と比較した。

QALY の負傷区分ごとの値を見ると、負傷 E、Y では SG 法の値と近い値となった。一方、QALY の負傷 Y、O、A と確定 CV 法の値を比較すると、負傷 A では、ほぼ同じ値となっているが、それ以外の値については、大きく乖離した。

表 s 4-12 平成 28 年度調査 一人当たりの死傷損失

負傷区分	SG 法 ¹ (億円)	確定 CV 法 (億円)	年当たりの QALY ² (億円)
K(死亡)	5.37	-	5.37
負傷 Q	4.26	-	5.97
負傷 E	3.05	-	2.95
負傷 Y	2.59	0.026	2.12
負傷 O	2.37	0.023	1.17
負傷 A	-	0.010	0.01

1: SG 法の代替率1を 5.37 億円として算出

2: 年当たりの QALY の値が1を 5.37 億円として算出

平成 28 年度調査では、最終的に、本調査の算出結果として後遺障害のない区分である負傷 A のみ確定 CV 法の結果を使用し、その他の負傷 Q~O では SG 法の結果を使用した。また、負傷 O は SG 法から算定した結果を用いて、後遺障害等級ごとに算出した。

表 s 4-13 平成 28 年度調査 一人当たりの死傷損失(設定値)

負傷区分	一人当たりの死傷損失 (億円/人)	算定方法
K(死亡)	5.37	SG 法
負傷 Q	4.26	
負傷 E	3.05	
負傷 Y	2.59	
負傷 O		
第 10 級	2.37	負傷 O が後遺障害等級第 10 等級と仮定し、第 11 等級からは後遺障害別等級の保険金上限の値の 10 等級に対する各等級の比率を乗じて算定
第 11 級	1.70	
第 12 級	1.15	
第 13 級	0.71	
第 14 級	0.39	
負傷 A	0.01	確定 CV 法

s 4.2 プレアンケート調査の実施

s 4.2.1 プレアンケート調査の実施方針

(2) 負傷区分の追加(負傷 S:後遺障害第 14 等級)及び EQ-5D-5L への対応の検討

1) 負傷区分の再構築と計測手法の検討

平成 23 年度調査、平成 28 年度調査における SG 法と確定 CV 法による負傷損失の算定結果を概観すると、平成 23 年度調査では算出手法の切り替わる負傷 R から I にかけて、算定値が不連続となっている。具体的には、負傷 Y の損失は、SG 法で 6,390 万円、確定 CV 法で 243 万円と約 26 倍の差が確認されている。

表 s 4-14 SG 法及び確定 CV 法によって得られた負傷区分別一人当たり負傷損失
(平成 23 年度調査)

	負傷損失(万円)							
	Q	W	E	R	Y	I	O	A
SG 法	19,200	10,700	8,520	6,390	6,390	-	-	-
確定 CV 法	-	-	-	-	243	189	131	23.7

注)死亡損失を 2.13 億円として算定

出所 『平成 23 年度交通事故の被害・損失の経済的分析に関する調査』(平成 24 年 3 月、内閣府政策統括官(共生社会政策担当))

		傷害度						死亡K
		①		3	4	5	-	
		1	2	3	4	5	6	
後遺症	①	1				負傷Q	死亡K と同等	
		2				負傷W		
		3						
		4				負傷E		
		5						
		6						
		7	負傷I		負傷Y	負傷R		
		8	負傷O					
		9						
		10	負傷A					
		11						
		12						
	後遺症なし		負傷A					
	健康J							

図 s 4-6 平成 23 年度調査における負傷区分

また、平成 28 年度調査においても、算出手法の切り替わる負傷 Y 及び負傷 O において、SG 法と確定 CV 法で約 100 倍の差があり、平成 23 年度調査以上に乖離が大きくなっている。

表s 4-15 SG法及び確定CV法によって得られた
負傷区分別一人当たり死傷損失(平成28年度調査)

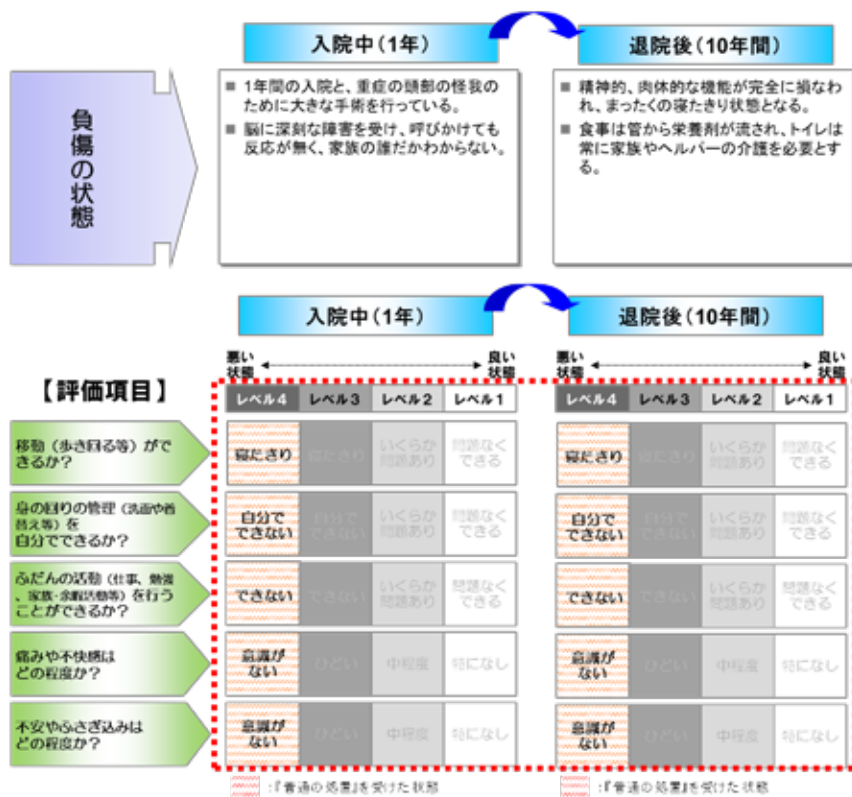
負傷区分	SG法 ¹ (億円)	確定CV法 (億円)
K(死亡)	5.37	-
負傷Q	4.26	-
負傷E	3.05	-
負傷Y	2.59	0.026
負傷O	2.37	0.023
負傷A	-	0.010

出所)「交通事故の被害・損失の経済的分析に関する調査報告書」(平成29年3月,内閣府政策統括官(共生社会政策担当))

4) EQ-5D-3L から EQ-5D-5L に基づく評価項目への変更

EQ-5D-3L から EQ-5D-5L に基づく各負傷カードを次頁の図s 4-7 ~ 図s 4-12 に示す。

EQ-5D-3L



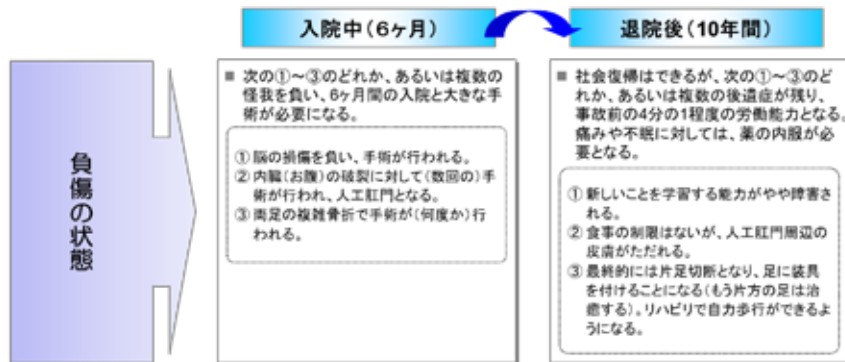
EQ-5D-5L

Q



図s 4-7 平成28年度調査のEQ-5D-3Lと今年度調査のEQ-5D-5Lに基づく負傷カード(負傷Q)

EQ-5D-3L



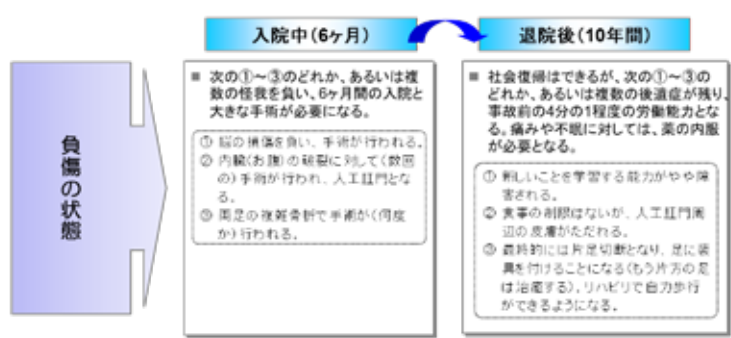
【評価項目】

評価項目	入院中(6ヶ月)				退院後(10年間)			
	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
移動(歩き回る等)ができるか?	ほとんどできず	ほとんどできず	いくらか問題あり	問題なくできる	ほとんどできず	ほとんどできず	いくらか問題あり	問題なくできる
身の回りの管理(洗濯や着替え等)を自分でできるか?	自分でできない	自分でできない	いくらか問題あり	問題なくできる	自分でできない	自分でできない	いくらか問題あり	問題なくできる
ふだんの活動(仕事、勉強、家族・余暇活動等)を行うことができるか?	できない	できない	いくらか問題あり	問題なくできる	できない	できない	いくらか問題あり	問題なくできる
痛みや不快感はどの程度か?	問題がない	ひどい	中程度	特になし	問題がない	ひどい	中程度	特になし
不安やふさぎ込みはどの程度か?	問題がない	ひどい	中程度	特になし	問題がない	ひどい	中程度	特になし

==== :「普通の処置」を受けた状態
==== :「普通の処置」を受けた状態

EQ-5D-5L

E



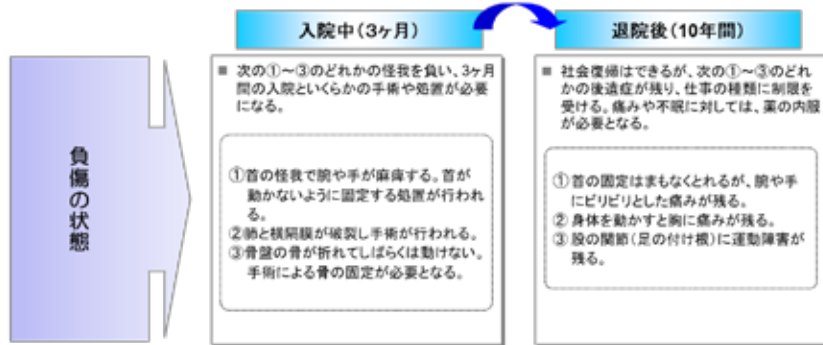
【評価項目】

評価項目	入院中(6ヶ月)					退院後(10年間)				
	レベル5	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	レベル5	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
移動(歩き回る等)ができるか?	ほとんどできず	ほとんどできず	いくらか問題あり	少し問題あり	問題なくできる	ほとんどできず	ほとんどできず	いくらか問題あり	中程度問題あり	少し問題あり
身の回りの管理(洗濯や着替え等)を自分でできるか?	自分でできない	自分でできない	いくらか問題あり	少し問題あり	問題なくできる	自分でできない	自分でできない	いくらか問題あり	中程度問題あり	少し問題あり
ふだんの活動(仕事、勉強、家族・余暇活動等)を行うことができるか?	できない	できない	いくらか問題あり	少し問題あり	問題なくできる	できない	できない	いくらか問題あり	中程度問題あり	少し問題なくできる
痛みや不快感はどの程度か?	極度にあり	かなりあり	中程度あり	少しあり	問題ない	極度にあり	かなりあり	中程度あり	少しあり	問題ない
不安やふさぎ込みはどの程度か?	極度にあり	かなりあり	中程度あり	少しあり	問題ない	極度にあり	かなりあり	中程度あり	少しあり	問題ない

==== :「普通の処置」を受けた状態
==== :「普通の処置」を受けた状態

図 4-8 平成 28 年度調査の EQ-5D-3L と今年度調査の EQ-5D-5L に基づく負傷カード(負傷 E)

EQ-5D-3L

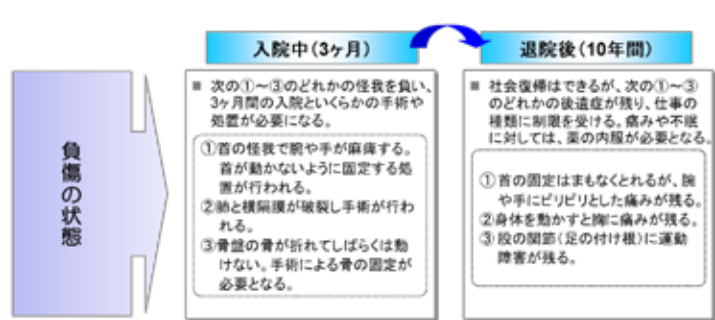


【評価項目】

	入院中(3ヶ月)				退院後(10年間)			
	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
移動(歩いたり等)ができるか?	できない	いくらか困難あり	問題なく	問題なく	できない	いくらか困難あり	問題なく	問題なく
身の回りの管理(着脱や食事等)を自分でできるか?	自分でできない	いくらか困難あり	問題なく	問題なく	自分でできない	いくらか困難あり	問題なく	問題なく
ふだんの活動(仕事、勉強、家族と遊ぶ等)を行うことができるか?	できない	できない	いくらか困難あり	問題なく	できない	いくらか困難あり	問題なく	問題なく
痛みや不快感はどの程度か?	問題がない	ひどい	中程度	特になし	問題がない	中程度	特になし	特になし
不安や心配はどの程度か?	問題がない	中程度	特になし	特になし	問題がない	中程度	特になし	特になし

~~~~~:「普通の状態」を受けた状態

# EQ-5D-5L



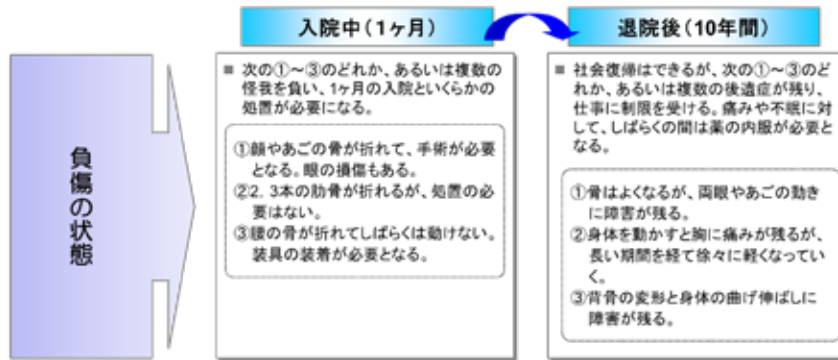
**【評価項目】**

|                                 | 入院中(3ヶ月) |         |          |        |      | 退院後(10年間) |         |          |        |      |
|---------------------------------|----------|---------|----------|--------|------|-----------|---------|----------|--------|------|
|                                 | レベル5     | レベル4    | レベル3     | レベル2   | レベル1 | レベル5      | レベル4    | レベル3     | レベル2   | レベル1 |
| 移動(歩いたり等)ができるか?                 | できない     | かなり困難あり | いくらか困難あり | 少し問題あり | 問題なく | できない      | かなり困難あり | いくらか困難あり | 少し問題あり | 問題なく |
| 身の回りの管理(着脱や食事等)を自分でできるか?        | 自分でできない  | かなり困難あり | 中程度困難あり  | 少し問題あり | 問題なく | 自分でできない   | かなり困難あり | 中程度困難あり  | 少し問題あり | 問題なく |
| ふだんの活動(仕事、勉強、家族と遊ぶ等)を行うことができるか? | できない     | かなり困難あり | いくらか困難あり | 少し問題あり | 問題なく | できない      | かなり困難あり | 中程度困難あり  | 少し問題あり | 問題なく |
| 痛みや不快感はどの程度か?                   | 非常にあり    | かなりあり   | いくらかあり   | 少しあり   | 問題なし | 非常にあり     | かなりあり   | 中程度あり    | 少しあり   | 問題なし |
| 不安や心配はどの程度か?                    | 非常にあり    | かなりあり   | いくらかあり   | 少しあり   | 問題なし | 非常にあり     | かなりあり   | 中程度あり    | 少しあり   | 問題なし |

~~~~~:「普通の状態」を受けた状態

図 4-9 平成 28 年度調査の EQ-5D-3L と今年度調査の EQ-5D-5L に基づく負傷カード(負傷 Y)

EQ-5D-3L



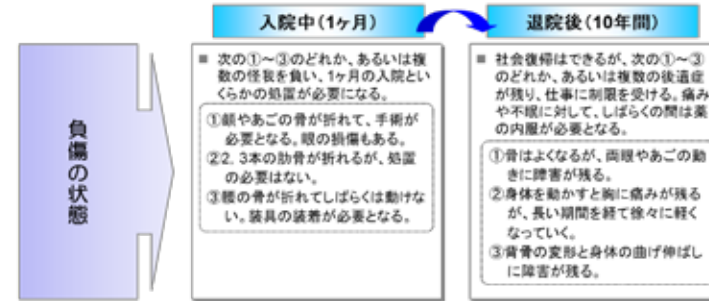
【評価項目】

| 評価項目 | 入院中(1ヶ月) | | | | 退院後(10年間) | | | |
|-----------------------------------|----------|---------|----------|---------|-----------|---------|----------|---------|
| | レベル4 | レベル3 | レベル2 | レベル1 | レベル4 | レベル3 | レベル2 | レベル1 |
| 移動(歩かざる等)ができるか? | 深たさ | かなり困難あり | いくらか困難あり | 問題なくできる | 深たさ | かなり困難あり | いくらか困難あり | 問題なくできる |
| 身の回りの管理(洗濯や着替え等)を自分でできるか? | 自分でできない | かなり困難あり | いくらか困難あり | 問題なくできる | 自分でできない | かなり困難あり | いくらか困難あり | 問題なくできる |
| ふだんの活動(仕事、勉強、家族・余暇活動等)を行うことができるか? | できない | かなり困難あり | いくらか困難あり | 問題なくできる | できない | かなり困難あり | いくらか困難あり | 問題なくできる |
| 痛みや不快感はどの程度か? | 無痛がない | 中程度 | 特になし | | 無痛がない | 中程度 | 特になし | |
| 不安やらさぎ込みはどの程度か? | 無痛がない | 中程度 | 特になし | | 無痛がない | 中程度 | 特になし | |

 :「普通の処置」を受けた状態
 :「普通の処置」を受けた状態

EQ-5D-5L

0



【評価項目】

| 評価項目 | 入院中(1ヶ月) | | | | | 退院後(10年間) | | | | |
|-----------------------------------|----------|---------|----------|--------|---------|-----------|---------|----------|--------|---------|
| | レベル5 | レベル4 | レベル3 | レベル2 | レベル1 | レベル5 | レベル4 | レベル3 | レベル2 | レベル1 |
| 移動(歩かざる等)ができるか? | 深たさ | かなり困難あり | いくらか困難あり | 少し困難あり | 問題なくできる | 深たさ | かなり困難あり | いくらか困難あり | 少し困難あり | 問題なくできる |
| 身の回りの管理(洗濯や着替え等)を自分でできるか? | 自分でできない | かなり困難あり | 中程度困難あり | 少し困難あり | 問題なくできる | 自分でできない | かなり困難あり | 中程度困難あり | 少し困難あり | 問題なくできる |
| ふだんの活動(仕事、勉強、家族・余暇活動等)を行うことができるか? | できない | かなり困難あり | 中程度困難あり | 少し困難あり | 問題なくできる | できない | かなり困難あり | 中程度困難あり | 少し困難あり | 問題なくできる |
| 痛みや不快感はどの程度か? | 極度 | かなり | 中程度 | 少し | 問題ない | 極度 | かなり | 中程度 | 少し | 問題ない |
| 不安やらさぎ込みはどの程度か? | 極度 | かなり | 中程度 | 少し | 問題ない | 極度 | かなり | 中程度 | 少し | 問題ない |

 :「普通の処置」を受けた状態
 :「普通の処置」を受けた状態

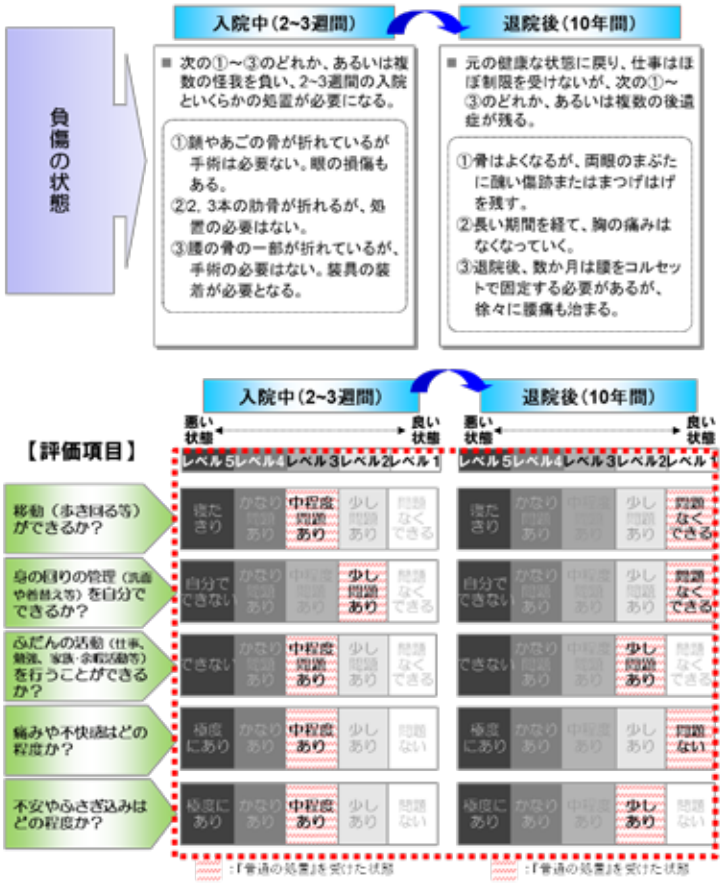
図s 4-10 平成28年度調査のEQ-5D-3Lと今年度調査のEQ-5D-5Lに基づく負傷カード(負傷O)

EQ-5D-3L

EQ-5D-5L

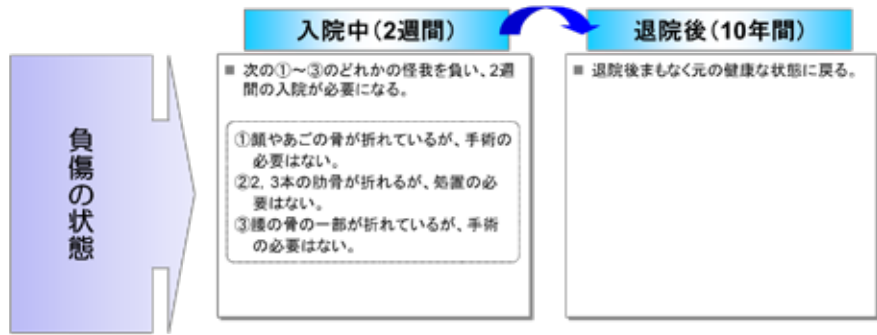
S

H28年度調査
負傷区分なし



図s 4-11 平成 28 年度調査の EQ-5D-3L と今年度調査の EQ-5D-5L に基づく負傷カード(負傷 S)

EQ-5D-3L



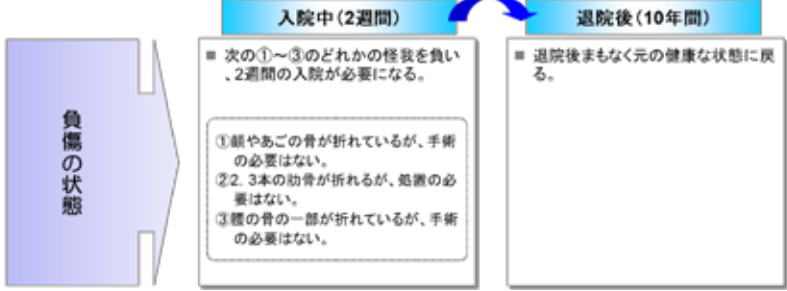
【評価項目】

| | 入院中(2週間) | | | | 退院後(10年間) | | | |
|-----------------------------------|----------|---------|----------|---------|-----------|---------|----------|---------|
| | レベル4 | レベル3 | レベル2 | レベル1 | レベル4 | レベル3 | レベル2 | レベル1 |
| 移動(歩き回る等)ができるか? | ほとんどできない | かなり問題あり | いくらか問題あり | 問題なくできる | ほとんどできない | かなり問題あり | いくらか問題あり | 問題なくできる |
| 身の回りの管理(洗濯や着替え等)を自分でできるか? | 自分でできない | かなり問題あり | いくらか問題あり | 問題なくできる | 自分でできない | かなり問題あり | いくらか問題あり | 問題なくできる |
| 心だんの活動(仕事、勉強、家族・余暇活動等)を行うことができるか? | できない | かなり問題あり | いくらか問題あり | 問題なくできる | できない | かなり問題あり | いくらか問題あり | 問題なくできる |
| 痛みや不快感はどの程度か? | 最悪がない | かなりあり | 中程度 | 特になし | 最悪がない | かなりあり | 中程度 | 特になし |
| 不安やふさぎ込みはどの程度か? | 最悪がない | かなりあり | 中程度 | 特になし | 最悪がない | かなりあり | 中程度 | 特になし |

 :『普通の処置』を受けた状態
 :『普通の処置』を受けた状態

EQ-5D-5L

A



【評価項目】

| | 入院中(1ヶ月) | | | | | 退院後(10年間) | | | | |
|-----------------------------------|----------|---------|---------|--------|---------|-----------|---------|---------|--------|---------|
| | レベル5 | レベル4 | レベル3 | レベル2 | レベル1 | レベル5 | レベル4 | レベル3 | レベル2 | レベル1 |
| 移動(歩き回る等)ができるか? | ほとんどできない | かなり問題あり | 中程度問題あり | 少し問題あり | 問題なくできる | ほとんどできない | かなり問題あり | 中程度問題あり | 少し問題あり | 問題なくできる |
| 身の回りの管理(洗濯や着替え等)を自分でできるか? | 自分でできない | かなり問題あり | 中程度問題あり | 少し問題あり | 問題なくできる | 自分でできない | かなり問題あり | 中程度問題あり | 少し問題あり | 問題なくできる |
| 心だんの活動(仕事、勉強、家族・余暇活動等)を行うことができるか? | できない | かなり問題あり | 中程度問題あり | 少し問題あり | 問題なくできる | できない | かなり問題あり | 中程度問題あり | 少し問題あり | 問題なくできる |
| 痛みや不快感はどの程度か? | 最悪にあり | かなりあり | 中程度あり | 少しあり | 問題ない | 最悪にあり | かなりあり | 中程度あり | 少しあり | 問題ない |
| 不安やふさぎ込みはどの程度か? | 最悪にあり | かなりあり | 中程度あり | 少しあり | 問題ない | 最悪にあり | かなりあり | 中程度あり | 少しあり | 問題ない |

 :『普通の処置』を受けた状態
 :『普通の処置』を受けた状態

図s 4-12 平成 28 年度調査の EQ-5D-3L と今年度調査の EQ-5D-5L に基づく負傷カード(負傷 A)